

## 〔書 評〕

## 飯田耕二郎（著）『ハワイ日系人の歴史地理』

久 武 哲 也

## I

評者の家族をめぐる私的な話から始めることをお許しいただきたい。私の母方の祖父は、明治末期における「日米紳士協約」（1907年）の合意の前年にハワイへ移民した者のひとりであり、そして私の母もハワイのオアフ島で生まれた日系2世である。私の手元には、16年前に亡くなった母の持ちもののひとつとして、大正時代の初期に祖父と母がオアフ島の住居の前で撮った写真があるが、それは祖父がマウイ島のスプレックルズビルにあった「ハワイ商業・砂糖会社」の砂糖キビプランテーション（耕地）労働者としての仕事をやめて、オアフ島ホノルル市郊外のモイリイリで「養豚業」（piggery）を始めたばかりの頃、新築の豚舎の完成祝いの際に撮ったものである。

この祖父が、本書の統計の中に数字として登場してくる。本書79頁に掲載された表3-10の1910年におけるハワイの「養豚業」の分布を示す統計においてである。この表の中で、出身県と居住地をクロスさせると、熊本県（出身県）とモイリイリ（居住地）が交差する欄に現われる1という数字、これが私の祖父である。

ハワイにおける養豚業は、本書の第3章で、飯田氏が詳しく論じておられるように、1920年のオアフ島における第2次ストライキ事件の結果、砂糖キビプランテーションを追放された日本人たちによって担われていく。とくに、1920年代になると熊本県出身者と沖縄県出身者がハワイにおける養豚業をほぼ独占していくことになる。しかし、それがホノルルの郊外に集中したのは、この時期に至って、ホノルルにおいては都市計画条例が施行され、とくにハオレ（白人）の居住地区から離れた場所に立地することを余儀なくされたこと、また、公衆衛生上の規制も厳しくなり、市街地から遠隔の地で、しかも市街地の水源を汚染しない範囲での立地しか許可されなかったからであるという。端的に言えば、こうした都市計画条例やそれに基づく線引きは、ホノルル市に居住するハオレ（白人）、とくに中産階級の市民の住宅環境を維持し、その資産価値の低下を防止するために、養豚業やその他の「フン」（糞）を利用する生業や農業を法的にも住宅地から隔離するためのものであった。祖父の話によれば、豚のエサはホノルルの市街地の中心部（当時は西端）にある中国人街の市場や食堂から出る残飯や野菜屑、サトウキビの精糖工場から廃棄される絞り滓、あるいはパイナップル農園で放置された収穫後の売れないタマ（屑パイナップル）などであったが、エサ不足の折には、随時その取扱いをやっていた中国人の業者から分けてもらっていたという。

養豚業を始めて間もない頃、資金繰りも順調にいかず、祖父は豚のエサ代にも苦勞したらしいが、しかし、この豚のエサを取扱っていた中国人の業者は、「金が出来た時に払ってもらえればいい」といって、代金の督促もしないまま、長期間にわたって祖父に豚のエサを供給してくれたという。こうした自らの苦勞の経験もあって、祖父は「中国人なえらか。商売のしみちば知っとる。(中国人はりっぱだ。商売のこころを知っている。)」と、小さい孫の私たちにまで時折語って聞かせ、そしてその気持ちを終生持ち続けた。本書を読んで、50年以上昔の祖父の言葉が改めて思い起された次第である。

## II

本書の最も著しい特徴を指摘するとすれば、そういう意味で、ハワイ諸島における日系人の母国における出身地とハワイで選択された職業との関係がさまざまな史資料からえられた統計数値を基礎にクロス集計されて、その結果、移住先における日系人の出身別の居住地の偏り、あるいは職業の選択に作用している移民の出身地の影響が具体的数値として初めて統計的に把握されたという点である。さらにまた、研究の方向づけというレベルにおいても、こうした作業を通して、飯田氏は、従来の移民研究の中で大きく欠落していたマクロなレベルにおける移民の趨勢とミクロなレベルにおけるオラルヒストリー（聞き書き）を中心とする個人や家族の移住史との間に存在する間隙を埋めるために、移住先の日系人の社会的・地域的条件あるいはその歴史的な変化の位相を、いわばメソスケールというレベルにおいて明らかにされたということであろう。移住先における居住地と職業選択に作用する地域的条件あるいはその社会的環境を復元しながら、同時にこうした条件の時系的変化の過程を丹念に辿っていくという作業こそ、従来の移民史研究の中であって大きく欠落していた部分であり、それゆえにまた、歴史地理学的な視点や分析方法が大きく貢献していくことの可能な領分であろうと思う。

本書の構成とその内容を概略ではあるが章ごとに紹介しておきたい。「まえがき」と「あとがき」、そして巻末の「資料」を別とすれば、序章から5章までの6つのセクションに区分されている。

「まえがき」では、従来のハワイ移民の研究史を整理しながら、移住先のハワイにおいて刊行された日本語史資料を基礎とする日本人の居住地あるいは職業構成の実態に関する分析が従来の研究においては大きく欠落していることを指摘し、ハワイにおける日本語史資料の発行状況、あるいは移民の居住地や職業構成を分析するに際して有効な日米双方の統計資料や著作の紹介が行われる。

序章「日本人の主な移住地－移民の沿革－」においては、1868－1941年の期間における中南米、南洋、北米あるいはロシア地域への移住者数の変化が「海外移住統計」として提示され、日本の移民政策や受け入れ地域の労働条件あるいは移民制度、さらにまた、さまざまな移民制限にかかわる法的措置との関係で移住先が大きく変化していく状況を、いわばマクロなレベルにおける移民の趨勢として提示する。ハワイへの移民が、日本人の海外移民の端緒となった状況を知ることができるだけでなく、その時代的背景もこの統計表から読みとることが可能である。

第1章「日系人の人口変遷と集住地域」では、ハワイ諸島における民族（エスニック）別の人口変化を1778-1950年の期間にわたって検討したのち、日系人の人口総数の変化あるいはハワイ諸島における各々の島単位での1890-1980年にわたる人口分布の推移とその変動要因について分析する。そしてハワイにおける1907-1936年の砂糖キビプランテーション（耕地）労働者数の変遷から、1909年に発生した第1次オアフ島ストライキ、さらに1920年に起った大規模な第2次オアフ島ストライキという2つの事件を契機に、日系人の職業構造に大きな転機が起ったことを明らかにする。さらに、1930年および1940年のアメリカ合衆国による国勢調査から、この間に、砂糖キビの精糖工場および関連産業の発展した地域あるいはホノルル市などの都市部へ向う日系人の人口移動が急速に増加したことを、両年度の国勢調査を比較しながら統計単位ごとに明らかにしていく。

第2章「日系人の居住地と出身地分析-1885年と1929年-」は、『日布時事布哇年鑑』（1929年）に見られる日系人の分布を出身県別に集計し、さらにそれを「官約移民」（1885-1886年）の居住地あるいは出身地と対比しながら、ハワイ諸島における日系人の出身地構成が1885-1929年の間にどの様に変化したのか、という問いかけをめぐって分析したものである。第1回官約移民のうち10人の個人的経歴をめぐる移住先のハワイでの居住地と職業の変遷に関する史料の検討は貴重な知見をもたらすものである。さらにまた、この章で提示されている歴史的な統計数値は、比較資料としても今後の研究にとって史料価値の高いものであるといえよう。

第3章「日系人の職業」では、『布哇日本人年鑑』（1919年）、アメリカ合衆国の国勢調査（1910-40年）あるいは『海外各地在留本邦人職業別人口表』（1919、1929年）や『通商彙纂』（1909年）、『日布時事布哇年鑑』（1936年）などのさまざまな史料から日系人の職業構成の変化を検討し、その結果、耕地（プランテーション）労働者から、都市部における家内労働（家事被雇人）、大工、散髪、小売業などのように小資本で経営の可能な職業への転業が1920-30年代に起ったことを具体的に明らかにしている。またコーヒー栽培、漁業、養豚業、湯屋業、自転車店、水屋、玉突場などの特定の職業が、特定の出身県の移民者に集中していること、さらに、出身県ごとに特定の旅館が存在し、移民のコミュニケーションや情報交換の場として大きな役割を果たしたことなどが指摘され、ハワイという移民社会の持つ特殊な条件のもとでの日系人の職業の選択に作用する要素をめぐって、従来の研究の中では見過されてきた側面に対し、異なった視点からの観察を通していくつもの新しい知見がもたらされている。

第4章「マウイ島の日系人」は、マウイ島というひとつの島を単位に、1920年代の砂糖キビプランテーションを背景とする経済的条件の中で、日系人の居住地分布の偏りと出身県との対応、さらに職業構成との関係をマウイ島内の居住地区ごとに綿密に検討したものであり、これも史料価値の高い統計表を含んでいる。とくに、各地区ごとに組織化された各種の団体や学校、寺院、日本語学校などの立地をめぐる具体的な分析は、居住地や職業の選択を背後から支えていた社会的環境の実態を詳細に伝えている。

第5章「オアフ島ハレイワ地域の日系人」は、1910-30年の時期におけるワイアルア砂糖キビプランテーションの耕地労働者の居住地（キャンプ）と商業地区における日系人の

職業の遍歴を、出身地と居住地移動を軸にしながら個別に検討したものである。資料1（「ハレイワ地域の日系人名録」）、資料2（「ハレイワの主な人物の履歴」）は、その具体的史料である。とくに資料2に収録された26名の移民者がハワイに移住した後、1954年までにどの様に居住地と職業を変えてきたのかという点をめぐる史料の丹念な追跡作業は、一見しただけでも多大の労力と時間を要したと思われる。それゆえにまた極めて史料的価値の高い個人の履歴の復元となっている。

### III

本書の構成は、このように序章の地球的規模における日本人移民の長期にわたるマクロな趨勢から始まり、その後、ハワイ諸島の全体を俯瞰しながら、さらにマウイ島というハワイ諸島の中央部を占めるひとつの島に焦点をあて、そして最後に、オアフ島の北部に位置する現在ではすでにさびれてしまったワイアルアのハレイワプランテーションにおける日系人移民者の個人史をめぐる分析というミクロな観察で終わる。このようなマクロなレベルからミクロなレベルに至る著者の観察を綴じ合わせるのが、居住地と職業そして母国の出身地という指標である。スケールを異にしながら見える移民の分布と職業構成の関係あるいはこうした関係が社会経済的条件、政治的状況、さらに日系人というエスニック集団の内部的条件のもとで変化していく位相の分析は、移民史研究の中に、新たにマルティスケールの分析方法を有効に導入しているという点で、長い研究史の中でも極めて斬新な歴史地理学的な発想に基づくものであらうと思う。移民先の居住地が特定の母国の出身県と深く結びつくと同時に、それが特定の職業選択の方向づけにも作用しているという指摘は従来からも多くの研究者によってなされてはきたものの、現地のハワイで発行された日本語史料をベースに、しかも統計的に網羅しながら統一的にその関係を提示した事例は、本書を以て嚆矢とするといえよう。史料的にもきわめて高い価値を持つ統計史資料が数多く収録され、今後の研究にとっても大きな意義を持つものであらう。

しかし、私の祖父が孫の私たちに語って聞かせた様に、中国人の援助がなかったら、おそらく日系人の養豚業の経営も困難であつたらう。祖父の義妹は、本書の最後の章に出てくるワイアルアに居住していたが、その末娘はフィリピン人に嫁し、また長男の方は沖縄県出身の女性と結婚している。フィリピン人の夫は、かつてフィリピンのイロコス（北）州から出奔した移民者で、しかもハイレワのプランテーションの耕地労働者であつたが、プランテーションの閉鎖後は長男の経営する商店で働いている。現在のハワイ日系人の家族の多くは、その構成員の中にこのように出身地もエスニックも大きく異なる者を含んでいるのが一般的であらう。そして、その職業も母国の出身地とのかかわり以上に、ハワイにおけるエスニック相互の分業と共存という条件のもとで多様化しているのが実状である。

1920年代から1930年代は、ある意味で日系人の都市への移住が急速に進行する時期であつた。しかし一方で、1910年代から日系人だけでなく、中国人やフィリピン人に対しては、州（準州）法による職業選択の制限もあつたし、また他方では、1920年代から1930年代にかけて、中国人やフィリピン人との間に、いわば「エスニック間分業」ともいうべき職業の「すみわけ」が形成されていた。日系人の移民者やその子弟にとって選択できる職業の

幅と条件が、法的にも、そしてエスニック間の分業という点でも制限されていたという点を考慮すると、日系人の間でも、出身県あるいは同郷団ごとに特定の職業への集中を発生させていく、この時期に特有の条件があったのではなかろうかとも考えられる。さらにまた、単身者が多かった砂糖キビプランテーションの耕地労働者の場合は、出身県が男性の特定の個人と対応するケースが多いと思われるが、しかし、家族を形成する段階、あるいは2世以下の女性の場合、出身県がどの様に居住地や職業の選択に影響を及ぼすのか、といった点をめぐっては、今後ジェンダーの問題も含めて改めて考えていく必要があるかと思う。と同時に、日系人の職業が日系人の社会の内部だけでは必ずしも完結し得ないとするれば、「エスニック間分業」という枠組と並行しながら、移民社会において職業の獲得できる経済的条件と法的制限、さらにエスニック間の対立と競合あるいは共存し合う条件などの側面についても、今後、より一層飯田氏に深めていっていただきたいと願うものである。

私の祖父が孫の私に語って聞かせた「中国人なえらか。商売のしみちば知っとる」という言葉が、現在のハワイでも通じる性格のものであるかのどうかは知らないけれども、祖父が中国人からのエサの援助をあてにして養豚業を営み、その後ある程度の金を貯め、私の祖母と結婚するということにならなかったとしたら、『バック・ツー・ザ・フューチャー』の映画ではないが、私がこの地球上に存在することもなかったであろうし、ましてや、30年以上昔から、移民研究への手ほどきをうけることになる飯田氏（飯田先輩）に出会い、さらにまたこの書評を書くはめになることもなかったであろう。本書は、評者自身にとって、自らの個人史の中に存在した不鮮明な過去の一部に改めて光をあててもらったという意味でも、誠に有難いものであった。余りに私的な書評となってしまったが、著者の飯田氏、そして『地域と社会』誌の編集者に対しても、この点、改めてご寛恕を乞う次第である。

（ナカニシヤ出版、2003年3月、viii + 164頁）